

営農情報

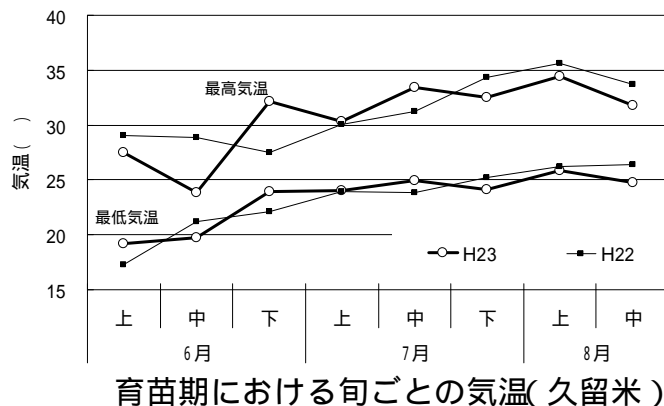
第110号平成23年9月2日発行

(イチゴ)

J A 福 岡 大 城
南 筑 後 普 及 指 導 セ ン タ ー

8月中旬から下旬にかけて雨が続いたことで、多くのほ場でまだ畝立ができていない様です。そのため、畝を立ててから定植までの期間が短くなると思われます。今後、畝立時にクロルピクリン錠剤で土壌消毒を予定している場合は、注意が必要です。クロルピクリン錠剤は、地温 15 から 25 の場合、10 から 15 日間のくん蒸（ビニル被覆）期間が必要となります。くん蒸期間を十分にとらないまま定植を行うと、ガス害により枯死する場合があります。くん蒸期間と定植日を考慮し、「くん蒸期間が足りなければ定植日を遅らす」などの処置を行って下さい。また、クロルピクリン錠剤を中止する場合は、センチュウ対策を実施して下さい。（センチュウ対策についてはJAまたは普及センターにお問い合わせ下さい）

7月下旬より昨年に比べ低温で推移しています。育苗期前半は根張りが悪く軟弱徒長気味でしたが、苗は順調に仕上がっているようです。ただ、8月中旬に雨が続いたことから炭そ病が一部のほ場で発生しています。引き続き、定期的な予防防除および早期発見・早期除去に努めて下さい。また、害虫については、アブラムシおよびハスモンヨトウの発生が多くみられますので、注意が必要です。



育苗管理

- 花芽分化促進のため、好天が続くようであれば、9月上旬より寒冷紗を被覆する。
- 肥料が切れているほ場や根張りが悪く(根傷み・根量不足)、輪斑病が激しく発生しているほ場は、寒冷紗を被覆するとともに、葉面散布(メリット青500倍など)を2~3回行う。

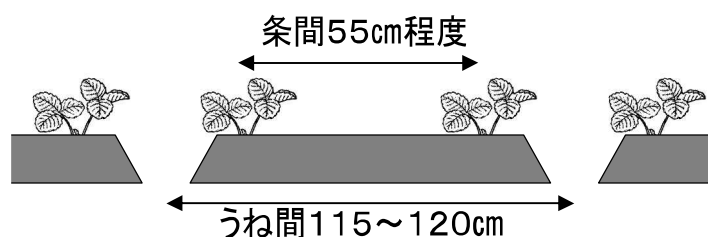
定植

- 畝を作った後は定植までビニル被覆(べたかけ)をしておく。
- 早い作型ほど高温時の定植になるので、活着促進・根痛み防止のために、定植前に早めに寒冷紗を張って、地温を下げる。
- 定植前に必ず花芽検鏡(1作型 3株/回)を行い、**最適な花芽分化ステージで定植する。**

定植日と花芽の分化程度の見当

定植日	分化程度(目安)
9月10～14日	分化～ <u>ガク片形成</u>
9月15～18日	分化～ガク片形成
9月19～22日	分化
9月23日～	肥厚後期

- 株冷・夜冷出庫時に花芽分化程度が低い場合は、数日後に再度検鏡し、定植する。苗傷みが予想される場合は、ただちに定植する。
- 普通ポットの定植時期は、気温で前後するが、9月23日頃が目安となる。
- 株間23～25cm(10月定植作型は20～23cm)



- 「あまおう」の果梗は、しなりがなく折れやすい。果梗は、クラウンの傾いた方向(湾曲した外側、一般にランナーの反対側)に伸びるので、果実を成らせる方向にやや傾けて定植する。
- クラウン部(葉柄基部:葉かぎした跡の付け根部分)からの一次根の発生を促すため、クラウン部分が土に密着するように定植する。ただし、深植え(クラウン部を埋める)は、厳禁。ポット表面が埋まる程度。
- 疫病予防に「リドミル粒剤2」の作条土壌混和を行う。

定植後の管理

寒冷紗による遮光

- 定植前に寒冷紗を被覆し、定植後は7～10日程度、活着する(日中も心葉がしおれなくなる)まで遮光しておく。
- 早期作型で、2番花房の花芽分化促進のために寒冷紗を利用する場合は、9月25日頃から10月20日頃まで被覆する。

寒冷紗例	遮光率
シルバー寒冷紗 109 番	39%程度
黒寒冷紗 600 番	51%程度
黒寒冷紗 610 番	58%程度

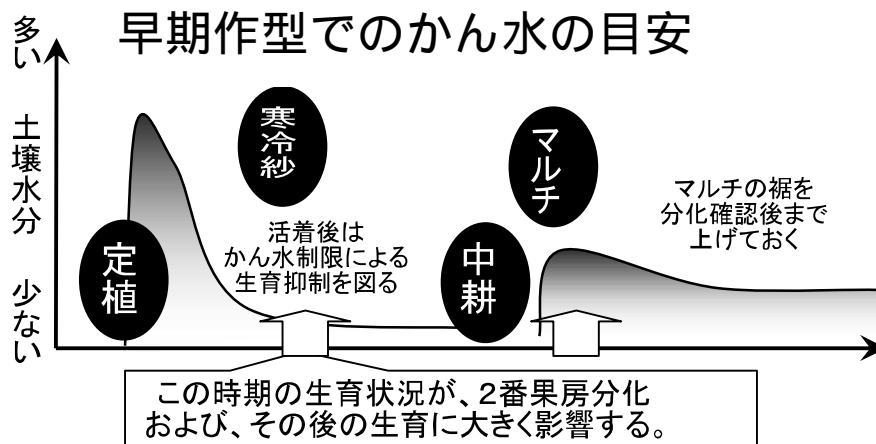
* 25日間の長期被覆は、遮光率や天候により、軟弱徒長となる場合がある。

* 曇天が続き、株弱りがひどい場合は寒冷紗を取り去る。

かん水

10月初旬で、最大葉（縦）8 cm程度の生育を目安

- ▶ 定植後のかん水は、頭上からのかん水が活着促進に効果的である。定植後2週間程度は、一次根の発生を促すため、クラウン部が常に湿っているように、少量・多回数でかん水を行う。
- ▶ 早期作型では、活着後、2番果房の分化安定を目的として、徐々にかん水量を控えていく。しかし、生育不良の場合は控えないようにする。



2番果房分化（～10月下旬）までの管理

作型によって2番果房の連続性が異なる。複数の作型を組み合わせ、全体としての安定出荷を目指す。また、各作型の安定出荷対策として、以下が考えられる。

◆ 早期作型の場合

基肥の削減や寒冷紗被覆、活着後のかん水制限を行い、生育抑制に努める。

◆ 普通ポットの場合

十分にかん水を行い、活着・初期生育促進を図る。活着肥・液肥はしない。

◆ 普通ポット晩期（9月29日以降定植）の場合

かん水等での活着・生育促進を図る。液肥かん注等により生育促進に努める。

病害虫防除

病害虫の効率的な防除には、害虫は発生初期の防除、病気は発生前の予防防除が重要である。多発してからの防除では、効果が低いので注意する。なお、定植後の薬剤散布は、活着してから始める。

炭そ病

- 育苗床で発病した苗は、見かけが健全でも使用しない。また、発病苗の周辺にあった苗も、罹病の可能性があるため出来るだけ使用しない（やむを得ず使用せざるえない場合は遅い作型にする）。
- 株冷の陽光処理や夜冷の日光処理中に夕立などの降雨があった場合は、葉の水滴がなくなるまで入庫しない。株冷の場合、翌日の早朝に入庫する。

アブラムシ

- ほ場周辺の雑草の除去を行う。

コルト顆粒水和剤	3000～4000倍	3回	前日	(ミツバチ注意)
バリアード顆粒水和剤	2000～4000倍	3回	前日	

ハスモンヨトウ・オオタバコガ

- ハスモンヨトウは葉裏やハウスパイプ等に卵塊を産み付けるので、発見したら卵塊を除去する。
- オオタバコガは、新芽や蕾に、卵をひとつずつ産み付け、ふ化した幼虫が新芽や蕾、果実の中に潜るため、発見が遅れやすいので注意する。
- 両種とも、発生初期（1cm程度まで）の若齢幼虫時の防除が重要である。

トルネードフロアブル	2000倍	2回	前日	(ミツバチ2日影響)
プレオフロアブル	1000倍	4回	前日	
フェニックス顆粒水和剤	2000～4000倍	2回	前日	
アタブロン乳剤	2000倍	3回	前日	(IGR剤：幼虫のみ効果)

ハダニ類

- 入庫前（定植前）は重要なハダニ防除適期である。しっかりと防除し、本田へのハダニの持ち込みを防ぐ。
- 「チリカブリダニ」を使用する場合は、影響が長い農薬の使用を避ける。

マイトコーネフロアブル	1000倍	前日	2回	(刈加リダニ：0日)
コロマイト水和剤	2000倍	前日	2回	(刈加リダニ：14日)
ダニサラバフロアブル	1000倍	前日	2回	(刈加リダニ：影響少)

かぶれやすい人は取り扱いに十分注意

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！